教育臨床心理学しけぷり（練習問題）

　　　　　　　　　　　　　　木４、前田基成教官

教育臨床心理学のしけぷりです。構成はテキストの最後に載っている練習問題について、「問題」→「根拠となる該当ページ」→「説明」という感じにしてみました。解答ではなく説明なんで実際書くだろう分量より多めに書いてあります。適当に要約なり抽出なりすれば、論述の解答になると思います。（テストにこれそのままは出ないだろうと思ったんで多少は掘り下げてあります）所々日本語が残念なこと（方言は心がけましたが…）、また一部（問９、１８）答えが見つからずカオスっている所があることなど様々にお詫びしなければならないのでここでお詫びします。該当ページを載せといたので、勉強の助けにはなるとは思いますので勘弁して下さい。もし間違いなどあれば、福島出身のシケ対までメールなり直接なり教えて下さい。あと、該当ページ読むと授業内容はある程度網羅できそうな感じの問題の作りになっています。でも抜けている所も多々あるので各自でやって下さい。それでは健闘を祈ります。

問題

１、精神分析的発達理論とはどのような理論か説明せよ。（cf局所論、構造論）

（説明）プリントP１２〜１４、テキストP１９〜２３

発達論とは生物学的考え方を基礎にしてつくられている。（生物とは「子孫を残すもの」と定義されている）

まず「リビドー」を想定する。リビドーとは生物である人間が個体を維持したり、種を保存したりするのに役立つ「精神的エネルギー」のことである。リビドーは成長発達の過程で身体のどこかに必ず顕著に現れる。

○それぞれの段階でリビドーが果たす生物学的な役割

口唇期；唇にエネルギーを集中させ、生き延びる。

肛門期；人間らしい生活（排泄）

エディップス期；大人の性行為の予備練習

潜伏期；一時的にリビドーは活動をしなくなる

性器期；性的な関心を高め、子孫を残す

　　各々の発達段階でリビドーが満足されればその後の性格形成には問題なしだが、リビドーが満足されないと（「固着」をおこすと）その後の性格形成に問題が生じる。なぜなら、成長した後に固着を起こした段階まで戻って（「退行」して）満足しようとし、結果的に特有の性格が形成されたり、病的な行動がみられるようになるからである。

例　・口唇性格：過度に甘えん坊で依存的な性格、指しゃぶり、爪噛みなどの

　　　　　習癖、クレプトマニー

肛門性格：強迫性障害（強迫神経症）、つまり几帳面、潔癖、こだわりな

　　　　　ど

エディップス性格：道徳性、性役割（男らしさ・女らしさ）の形成がな

されない。

２、挫折愛タイプのストーカーの心理について述べよ。

1. 最近、急増している乳幼児虐待の問題点をアタッチメント理論から説明せよ。

（説明）プリントP２４〜３２、テキストP３５〜４８

虐待には身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、心理的虐待の４種類がある。虐待（主にネグレクト）によって乳児が愛着行動を示しても、母親が適切に応答してくれない（アタッチメントが形成されていない）と他者に対する内的ワーキングモデルは「困ったときにも人は助けてくれない」→「消極的な性格になる」。また母親の応答を引き出せなかったことで子供は自分の能力に対して不信感をもち、結果的に自分に対して肯定的な感情が持てない、自分に自信が持てない性格が形成される。

1. 電車の中で母親におんぶされた赤ん坊が、じっとこちらの方を見てたことについて生物学的な観点から述べよ。

　（説明）プリントP１８〜２０、テキストP２５〜３０

　生物としてのヒトは生理的早産であり、乳児は自力移動できない。故に進化の過程で生存可能性を高めるために、人間の乳児は大人とコミュニケーションする能力を身につけた。

例；赤ん坊は人間の顔を最も好んで見つめる。「３ヶ月微笑」（赤ん坊は誰にでも愛敬を振りまく）や「７ヶ月微笑」（人見知り）。

つまり、乳児は自分を「かわいい」「愛らしい」と思わせ、大人の養育行動を引き出そうとする。そして自分の生存可能性を高めるために、大人に養育させている。しかも「３ヶ月微笑」でも、まだ養育能力のない子供には微笑まない、また「７ヶ月微笑」では親以外の大人に対して微笑まずに、親に大きな優越感を与えるなどの高級テクニックを用いている。（注視、微笑、泣く、喃語など親を自分の方に引き寄せる信号を愛着行動という。）

５、対人恐怖はなぜ青年期に起こりやすいのか説明せよ。

６、最近、学校でしばしば見られるというADHDの子供について、どのような子供か。最近、増えたといわれるがそれはなぜか。この２点について論述せよ。

７、アダルトチルドレンと児童虐待について述べよ。

（説明）プリントP３１、３２

アダルトチルドレンとは子供に対する大人の思いや要求を常に先取りして行動したり、大人の顔色を伺いながら自分の行動を決定するといった、「小さな大人」的な存在になる子供のことである。これは偽成熟と呼ばれる状態で、親の望む「良い子」になろうとして、大人の要求を常に敏感にとらえて行動する結果である。本来はアルコール依存症である養育能力に欠ける親の元で育ったために、幼い頃から大人の役割を担わされ、大人の世話をせざるを得ず、子供らしい生活ができなかった人達をさすものであったが、近年では、それに限らず、子供時代に虐待を受けていた人たちにも広く当てはまることが知られている。現在では、アダルトチルドレンは親との関係で何らかの心的外傷体験（トラウマ）を負って成人した人たちを指す。アダルトチルドレンは常に他人から孤立しているような感覚を持ち、生き生きとした愛情を実感することができず、自分の人生や将来に期待を持つことができず、不安や攻撃的感情を調節する能力が低下している。自己評価は低く、常に他人から必要とされていないと不安になるため、必死に他人に尽くそうとする。その形成過程は役割逆転という観点から説明可能である。通常の親子関係では、親が子供の「欲求を満たす役割」を果たし子が「満たされる役割」を担っている。しかし、虐待が生じる親子関係ではその役割は逆転しており、その中で成長した子供は自分自身の欲求は犠牲にして常に他者の欲求を満たすことに躍起になり、他者の欲求を満たせない自分には存在価値を感じることができないなど、様々な心理的不適応をきたす。また身体的虐待が生じる場合も役割逆転を特徴としやすく、子供に対して、大人の欲求や感情に対する敏感さを要求することとなる。結果的に子供は自分の「子供らしさ」を犠牲にし、健康的な依存性や創造性も抑圧されてしまう。さらにこの場合、親は「いちいち親の顔色を伺うかわいくない子供」と否定的拒否的にとらえることが多く、これにより虐待がひどくなる悪循環に陥ることもある。

８、「ガンは心身症である」ということは正しいか。これについて述べよ。

９、幼児は男らしさ、女らしさをどのようにして身につけるか。精神分析理論の立場から説明せよ。

（説明）テキストP２１、２２

精神分析理論の発達論によると、エディップス期は大人の性行為の予備練習の時期である。この時期には、性器の違いから男女の性の違いにも興味を持ち、自分の性器をいじっていたり、異性の親に対して性愛的感情を抱く。（性器いじりなどの性的行為や性行為の関する興味は、自分より巨大な力をもった両親によって禁止される。）異性の親に対して性愛的感情をもち、愛情を独占したい場合、エディップス・コンプレックスという性愛的願望、同性の親に対する敵意、罰せられる不安（異性の親を愛するのはいけないことではないか）の３つの心理的要素の複合に悩まされ、リビドーは満足されにくくなる。現実には異性の親を奪うのは不可能なので、同性の親の行動や考え方を自分の中に取り入れて気を引こうとしたりする「同一視」をする。これが男らしさや女らしさの形成に関わるのである。（すいません、具体的箇所が見つからなかったので自分で作っちゃいました。そうじゃなかったらごめんなさい。ちゃんとした答えがわかった方はシケ対まで知らせて下さい。）

１０、自己愛傾向と攻撃性について説明せよ。

（説明）

１１、最近よく“普通の子がきれて”暴行事件を引き起こすということが報道されるが、「きれて他人に暴行を加える」という攻撃行動が起こる心理的メカニズムを自己愛の観点から説明せよ。

（説明）

１２、次の語句を具体的な例をあげて説明せよ。

1. 利己的な帰属のバイアス②栄光浴③内集団的態度④下向きの比較⑤自己評価維持理論⑥セルフ・ハンディキャップ方略

（説明）プリントP５０〜５６、テキストP６１〜７０

1. まず原因帰属とは「こうなったのはどうしてか。」を推測、判断することであり、それが内的な原因に帰属するか、外的な原因に帰属するかは自尊感情と関連している。利己的な帰属のバイアスとは、うまくいったときは内的な帰属をし、うまくいかなかったときは外的な帰属をするように、自己防衛的な（自尊感情を上げ、低下させない）、つまり自分にとってかなり都合のよい原因帰属をすることである。例えば、うまくいくと才能や努力のせいにし、悪くなると運や偶然のせいにすることである。②「タレントの○○さんは自分の家のすぐ近くに住んでいる」、「自分のおじいさんは夏目漱石を知っていた」などのように、高い価値をもつ個人と自分との間には何らかの結びつきがあることを他人に積極的に示すことで自尊感情を高めようとする方法である。（テキストの言葉では）自分の言動を通じて直接的に自分の印象を操作するのではなく、有名人と自分の結びつきを強調することによって自分の印象を間接的に好意的なものにすることである。③自分が所属する集団のことを内集団といい、家族、学校、同窓会、若者という世代など、様々なものがある。人は自分が所属する集団を高く評価し、価値を認めることで、自分がその集団の一員であるということに肯定的な意味をもたせ、自尊感情を高揚しようとする。また、自分の集団の価値を相対的に高めるために、自分が所属しない集団（外集団）やライバル集団の価値を下げようとする。これらを内集団的態度という。例えば、テレビで関西弁を全面に押し出すタレントは「関西人であること」という集団に価値をおいており、そのメンバーであることを際立たせようとして、東京にいても関西の言葉を使ったり、東京と関西を比較して関西の良い面を主張したりするがそのことをいう。④自分が何らかの脅威（例えば病気、成績低下など）にさらされた場合、自分を恵まれない他者（例えば自分より症状の重い患者、成績が悪い者）と比較する傾向が強まることがあるが、これを下向きの比較といい、人はこれによって自尊心の低下を防ごうとしている。⑤詳細は１９参照。例：自分の友人は勉強はできるが、歌は自分のほうが上手い。このとき自分は勉強という自分には重要でないことには友人を素直に認めたり、積極的に他人に言いふらしたりして、反映により自己評価を高める。一方、自分が重要視している歌にかんしては（自尊感情の拠り所となっている事柄）自分のほうが上手いと、比較によって自己評価を高める。⑥成功できるか確信が持てない場合に、「体調が悪い」「最近眠れない」などと予め自分には不利な条件（ハンデキャップ）があることを主張したり、実際に不利な状況を作り出してしまうことである。これによって自尊感情の低下を最小限にとどめられる。

１３、①自己愛とはどのようなものか、②また最近、自己愛傾向の青年が多くなったといわれるが、その社会的背景にはどのようなものが関与していると思われるか。

１４、人生初期の乳児期は重要であることをアタッチメント理論から説明せよ。

（説明）プリントP２０〜２４、テキストP２８〜３６

アタッチメントとは乳児と母親との間に成立する心理的結びつきのことであり、乳児からの愛着行動（親を自分の方に引き寄せる信号）に母親が応答することを繰り返すことによって成立する。この成立は安定した情緒や性格が形成される基礎となっている。アタッチメントと性格形成には随伴性探知（自分の行動によって外部の環境に影響を与えることに気づき、探ろうとすること）と自己効力感（自分の行動をうまくできるかという予期、見通し）の観点から考えることができる。アタッチメントが形成されていると他者に対する内的ワーキングモデルは「自分が困っているときには、必ず誰かが助けてくれる」→「新しい場面に出て行ける何事にも積極的な性格」になり、また、自分の能力に対して信頼感を持てるので、自分に対して肯定的な感情を持ち、自分に自信のある性格が形成される。一方アタッチメントが形成されないと、他者に対する内的ワーキングモデルは「困ったときにも人は助けてくれない」→「消極的な性格」になり、また自分の能力に対して不信感を持つため、自分に対して肯定的な感情が持てない、自分に自信が持てない性格が形成されるようになる。

１５、摂食障害の歴史的・社会的背景について論述せよ。

（説明）プリントP４１〜４３、テキストP57〜60

　かつて飢えと戦っていたころは、太っていることが権力、富裕階級の象徴であり１６００年代はヨーロッパの上流階級の食事は量に重点が置かれていた。しかし１７００年代ごろからジャガイモの栽培により食物の供給は良くなり、上層階級の食事は量より質に重点をおくようになる。そのため美食を少し食べ、やせた体型でいることが、下層階級との差別化の手段、自分達が富裕階級であることを確認するための手段となった。１８００年代の資本主義社会になると、新たに社会で成功した富裕階級も美食をスリムな体型を目指すようになり、庶民はスリムな体型に憧れるようになる。またこのころ、医学的知識の普及により、美食は肥満になりやすく、病気につながるという考え方が世の中に広まり、肥満は敵である考え方が現れた。結果として、社会で成功した人はスリムな体型であるが、それは自己管理、自己コントロールができる有能な人間である、つまり、社会で成功するためには、「有能＝スリムな体型」でなくてはならないという考え方が世の中に広まっていった。

　第二次大戦後、男女平等社会になり、女性の自立・社会進出が始まることで、女性にも社会で有能（→スリムな体型であること）が求められる。そこで自分の自己評価が低い女性は、ダイエットに励みスリムな体型を維持することで有能感を獲得し、自己評価を高めようとするようになり、結果として摂食障害がおこるようになった。（ちなみに、女性解放運動により女性のヒステリーはなくなっていったが、これは男尊女卑への欲求不満が原因である。それに代わって男性と一緒にやっていくことの自信がないために摂食障害が増加していく。）

１６、多重人格を心理的な適応という観点から述べよ。

（説明）プリントP７〜１０、テキストP２

多重人格は解離という心理的はたらきによってもたらされるが解離とは、過去の強いストレスを体験した経験を思い出しそうになると、意識が飛ぶ、しばらくの間記憶がなくなる、記憶がなくなるなど、意識や記憶が現在のまとまった（統合された）「自分」から切り離された状態のことである。多重人格は、強いストレス体験から逃れるために、自分とは「別の人」ならそのような経験はないから、「別の人」なってしまえば、思い出して不快になったり、苦痛になったり、不安になったりしなくてすむという心理的メカニズムが働いて起こるものなのである。故に心理的適応という観点からみて、多重人格は不適応＝病気なのではなく、適応のためのものなのであるとかんがえられる。

１７、対人不安と自己の心理との関連について論述せよ。

（説明）

１８、神経性食欲不振症と神経性過食症の類似点と相違点について説明せよ。

（説明）プリントP３６〜３７、テキストP５０〜５２

神経性食欲不振症（いわゆる「拒食」）と神経性過食症にはそれぞれ次の診断基準がある。

　神経性食欲不振症：A、標準体重より著しくやせているが、まだやせたいと思

　　　　　　　　　　　　っている。

　　　　　　　　　　B、太るのがとても怖い（肥満恐怖）。

　　　　　　　　　　C、やせているのに自分で自分をやせていると思えない

　　　　　　　　　　　（ボディイメージの歪み）。やせているのに本人は全く

　　　　　　　　　　　平気である。（過活動が見られる）

　　　　　　　　　　D、無月経（月経停止）

　　　他にも①「制限型」と「むちゃ食い／排出型」がある。②発症時期は圧

　　　倒的に１０代。③患者は圧倒的に女性。④病識はない。（自分を病気であ

　　　ると思っていない）などの特徴がある。

　神経性過食症：A、むちゃ食いという過食のエピソードが繰り返し続いている。

　　　　　　　　B、食べた後は体重が増えるのを恐れ、食べたものを出したり、

　　　　　　　　　下剤や浣腸をつかって出そうとしたりすることを試みる排

　　　　　　　　　出行動が見られる。

　　　　　　　　C、このようなむちゃ食い、排出行動は毎週２回以上、３ヶ月

　　　　　　　　　以上続いている。

　　　　　　　　D、太ったり体重が増えたりすると、自分がだめな人間に思え

　　　　　　　　　　る。

　　　　　　　　E．神経性食欲不振症に伴うばかりでなく、単独でも生じる。

　　　他にも①一般に感情（特に衝動性）のコントロールが困難。②過食・嘔

　　　吐の後は罪悪感を感じて落ち込む。③神経性食欲不振症と同じやせ願望

　　　や肥満恐怖をもっており、過食時以外は自らダイエットを行っている。

　　　などの特徴がある。

（すいません。類似点、相違点わかりませんでした。類似点は共にやせ願望や肥満恐怖を持っていることとかだと思うのですが…。相違点は微妙です。わかった人はシケ対まで知らせて下さい。マジですいません。）

１９、自己評価維持理論とはどのようなものか説明せよ。

（説明）プリントP５０、５１、テキストP６３〜６５

自己評価維持理論とは、反映と比較に上手く使い分けることで自己評価を高く維持しようとすることである。反映では、友人の優れた業績や価値を積極的に認め、その価値のある友人と仲良しの自分も価値があるという自己評価をしようとする。比較では、友人と自分を比較する。この場合、その友人が優れていると反映によって自己評価を高めることができるが、比較により素直に自分と比べると自己評価を下げることにもなる。また自分よりも「出来の悪い人」では反映によって自己評価を上げることができない。こういった問題点を解決するために自己評価維持理論をもちいるのである。つまり、自分が今最も関心があり自尊感情の拠り所となっているものについては、比較により「自分の方が優れている」と自己評価を高め、全く関心のなく、どうでもよい、自尊感情を脅かされることのない事柄や活動については、反映により、「相手の方が優れている」として自己評価を高めるのである。

２０、人間の乳児の特殊性を生理的早産という観点から説明せよ。さらに、人間の乳児は生理的早産であるが故に、生物としてどのような能力を身につけたか述べよ。

（説明）プリントP１８〜２３、テキストP２５〜３０

ほ乳類を鳥類における就巣性と離巣性の分類概念によって分類すると、妊娠期間が短く、１回の出産で生まれてくる子供の数が多く、出生後しばらくは自力で移動できず、感覚器官が閉じられており出生後しばらくは自力で移動できないほ乳類（例；ネズミ、ネコ、イヌなど）は就巣性に、一方妊娠期間が長く、１回の出産で生まれる子供の数は通常１匹であり、感覚機能や運動機能も発達しており出産後すぐに活発に動き回るほ乳類（例；サル、クジラ、ウマなど）は離巣性に分類される。しかし、人間は出生時、感覚器官は発達していながらも自力で移動できないため就巣性と離巣性の両方の特徴を併せ持っている。これは人間の脳が発達し、出産時に大きな頭をもつ胎児を出産することが困難になったため、脳が発達する途中の段階（マイナス１２ヶ月の早産の状態）で生まれるようになったことである。これを生理的早産（二次的離巣性）といい、この点で人間の乳児は特殊であるといえる。これにより人間の乳児は親の養育がなければ、生存不可能であり、生存可能性は低くなった。そのため、人間は進化の過程で生存可能性を高めるべく、大人とコミュニケーションする能力を身につけた。具体的には、①乳児は人の顔を好んで注視する。②生後３ヶ月の乳児は誰にでも愛敬を振りまく。（３ヶ月微笑）③生後７ヶ月の乳児は自分の親には微笑反応を示すが、見知らぬ人には不安な表情を見せたり、泣き出したりして、親にえもいえぬ優越感を与える。（７ヶ月微笑）などである。つまり自分を「かわいい」「愛らしい」と思わせ、大人の養育行動を引き出そうとするのである。こういった注視、微笑、泣く、喃語などの親を自分の方に引き寄せる信号を愛着行動といい人間はこれによって生存可能性を高めたのである。